

小学校第5学年 E ボール運動 ア ゴール型「タグラグビー」 大野城市立御笠の森小学校

単元目標

知識及び技能	タグラグビーの行い方を知るとともに、ボール操作とボールを持たないときの動きによって陣地を取り合う簡易化されたゲームをすることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	誰もが楽しくゲームに参加できるようにルールを工夫したり、チームの特徴に応じた作戦を選んだり、課題の解決のために考えたことを仲間に伝えたりすることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	運動に積極的に取り組み、ルールを守り仲間と助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、仲間と互いの考えを認め合ったり、場の安全に気を配ったりすることができるようにする。

※共：男女共習

	① ②	③	④ ⑤	⑥ ⑦	⑧ ⑨
ねらい	タグラグビーの特性やボール操作等について理解するとともに、単元の見通しをもつことができる。	ルールを工夫（得点方法、コートの広さ）し、みんなでタグラグビーのゲームを楽しむことができる。		チームの特徴に応じた作戦を選んだり考えたりしながら、みんなでタグラグビーのゲームを楽しむことができる。	大会を開催し、単元のまとめをすることができる。
導入	共：心と体をほぐすために、タグ取り増え鬼ごっこやランバスタイムトライアルで、ウォーミングアップを行う。				
展開	準備運動含む学習の進め方を知る。	工夫するルール（得点方法）を確認し、本時学習のめあてをつかむ。	工夫するルール（コート広さ）を確認し、本時学習のめあてをつかむ。	チームの特徴に合った作戦を選んだり考えたりすることを確認し、本時学習のめあてをつかむ。	これまでの学習を生かして大会を行うことを確認し、本時学習のめあてをつかむ。
	共はじめのルールを提示し、試しのゲームを行う。 ・1チーム4名（男女混合）とし、ゲームを行う。	得点方法やコート広さを観点にルールを工夫する方法を提示し、チームで課題追究を行う。 共：児童が仲間と関わり合いながら繰り返し課題追究をすることができるようにペアチームで課題追究を行う方法を提示する。 共：課題追究で感じたことを伝え合い、互いの考えや取り組みを認め合うことができるように、練習後に振り返りの時間を設定する。		いくつかの作戦例を提示し、チームで課題追究を行う。 共：児童が仲間と関わり合いながら繰り返し課題追究をすることができるようにペアチームで課題追究を行う方法を提示する。 共：みんながチームに貢献できる役割をもった作戦になっているかどうかを伝え合い、互いの考えや取り組みを認め合うことができるように、練習後に振り返りの時間を設定する。	得点方法やコート広さ、作戦をチームで考えながら大会を行う。 共：ゲーム後、みんなが楽しむことができているか、チームに貢献できる役割をもった作戦になっているかを伝え合い、次のゲームで修正できるように話し合う時間を設定する。
終末	試しのゲームの感想を伝え合い、単元のめあてをつかんだり、見通しをもったりする。	試しのゲームを行い、本時学習の振り返りを行う。 共：課題追究してきたことをもとに、児童全員がゲームを楽しむことができるようにするために、ゲーム前にチームで得点方法やコート広さ、作戦について話し合う時間を設定する。 共：互いの考えや取り組みを認め合うことができるようにするために、チーム内や全体で伸びや頑張りや称賛し合う時間を設定する。		単元の振り返りを行う。 共：単元を通してみんなが楽しむことができるようにルールを工夫したり作戦を考えたりしたよさを交流し称賛する時間を設定する。	

評価規準
【知識・技能】 ①スローフォワード等、タグラグビーの行い方について、言ったり書いたりしている。 ②ボールを持ったときにトライゾーンに体を向けて走ったり、後方にいる味方にパスをしたりすることができる。 ③ボール保持者の後方で、パスを受ける位置に移動することができる。
【思考・判断・表現】 ①ルールを工夫している。 ②チームの特徴に応じた作戦の中で、自己の役割を確認している。 ③攻撃をする時の動きについて考えたことを仲間に伝えている。
【主体的に学習に取り組む態度】 ①ゴール型の簡易化されたゲームや練習に積極的に取り組もうとしている。 ②ゲームのルールを守り、仲間と助け合おうとしている。 ③ゲームの勝敗を受け入れようとしている。 ④ゲームや練習中に互いの動きを見合ったり話し合ったりする際に仲間の考えや取り組みを認めようとしている。 ⑤ゲームや練習の際に、場の危険物を取り除く等、安全に気を配っている。

知識・技能		①			②		③	総括評価
思・判・表			①		②		③	
主	⑤	③	①	②	④			

実践事例

チーム全員で協力して攻撃し、得点する楽しさを味わうことができるルール工夫
小学校第5学年 E ボール運動 ア ゴール型「タグラグビー」

大野城市立御笠の森小学校

1 単元の目標

- タグラグビーの行い方を知るとともに、基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、陣地を取り合う簡易化されたゲームをすることができるようにする。【知識及び技能】
- 誰もが楽しくゲームに参加することができるように、ルールを工夫したり、チームの特徴に応じた作戦を選んだり、課題解決のために考えたことを仲間に伝えたりすることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】
- 運動に積極的に取り組み、ルールを守り、仲間と助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、仲間と互いの考えを認め合ったり、場の安全に気を配ったりすることができるようにする。【学びに向かう力、人間性等】

2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

(1) チームの実態に応じて、得点方法を選択できるルール工夫

本学習では、チーム全員で協力しながら攻撃し、子供一人ひとりが得点に貢献できた楽しさや喜びを味わうことができるようにするために、ルールの工夫として、チームの実態に応じて、「ボーナス得点ゾーンの選択」と「コート幅の広さの選択」ができるようにした。

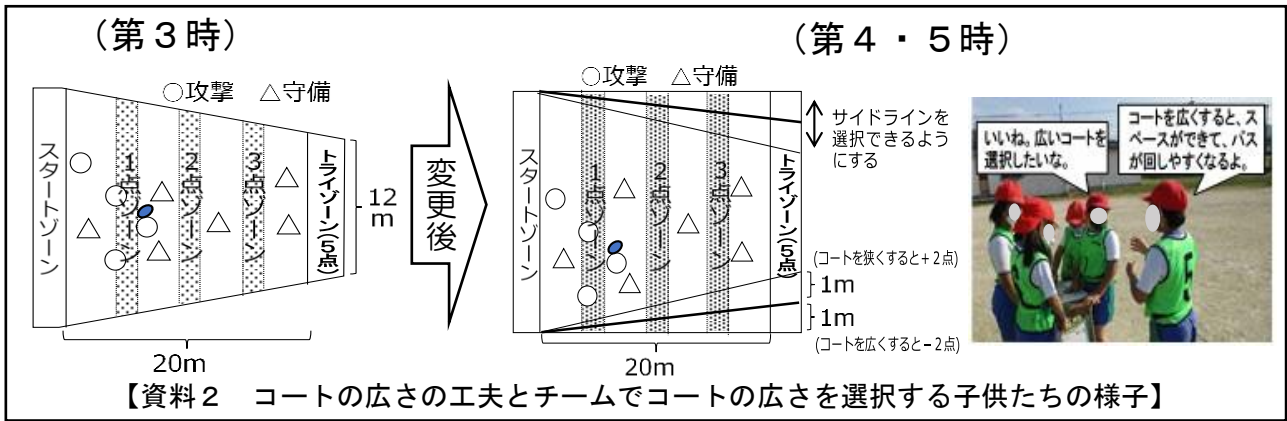
① ボーナス得点ゾーンについて

第1時、第2時で行った試しのゲーム後、子供から「トライできて（得点することができて）うれしかった。」や「チームで攻撃しながらトライゾーンの近くまで行けたけど、結局トライできなかった。（得点できなかった。）」という感想が聞かれた。そこで、チームの技能の程度にかかわらず、どのチームも協力してボールを運び、得点する楽しさや喜びを味わうことができるようにするために、第3時では、フリーゾーンを、進んだ距離に応じて得点できる「ボーナス得点ゾーン」とし、チームの技能の程度に応じて1カ所だけ選択できるようにした。【資料1】

【資料1】 ボーナス得点ゾーンとチームでゾーンを選択する子供たちの様子】

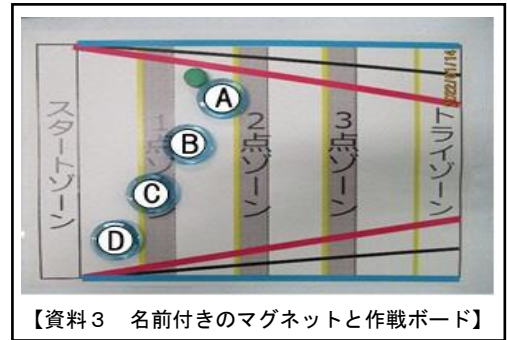
② コートの広さについて

第3時のゲーム後には「トライゾーンまで行けなかったけど、チームで協力して3点ゾーンまで行けてうれしかった。」という感想が聞かれた。また、「コート幅を広くすると、スペースができるからチームでもっとパスを回しながら攻撃できるようになって、たくさん得点できると思う。」という意見が聞かれた。そこで、第4、5時では、よりチームで協力してたくさん得点し、みんなでゲームを楽しむことができるようにするために、チームの技能の程度に応じて「コート幅の広さ」を選択できるようにした。【資料2】



(2) 自他の考えを可視化できる作戦ボードの活用

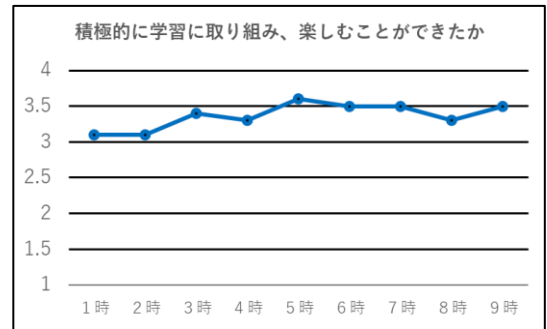
体育科学習において、自分の考えを仲間に上手く伝えることが難しい児童がいることが考えられる。そこで、全ての児童が、自分が感じていることや考えていることを仲間に伝えることができるように、一人ひとりに名前付きのマグネットを準備し、作戦ボード内で活用するようにした。【資料3】このような作戦ボードを活用したことで、「〇〇さんは、どうして、2点ゾーンがいいの？」等、チームで互いの意見を聞き合い、認めようとする姿が見られた。



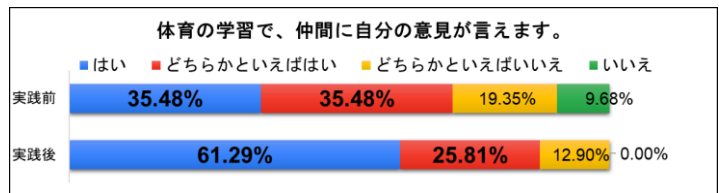
3 成果と課題

(1) 成果

○ 毎時間の学習後に行ったアンケート「4項目質問紙アンケート(4件法) Q:『積極的に学習に取り組み、楽しむことができたか。』については、平均値が3.0点以上を維持しながら推移している。これは、チームの実態に応じてルールを工夫しながら学習を重ねたことによって、チームで協力し、パスを回して攻撃し、得点する楽しさや喜びを味わうことができたからだと考える。また、得点するためにチーム内で互いの考えを伝え合い、その考えのよさを認め合いながら学習に取り組むことができたからであると考え。



○ 単元実施前後に行った「体育の学習に関する児童アンケート(21項目質問紙アンケート) Q:『体育の学習で仲間に自分の意見が言えますか』については、単元後87%の児童が「はい」「どちらかといえばはい」と回答している。これは、【資料3】のように、一人ひとりに名前付きのマグネットを準備したことで、「誰が、どうするか」考え伝える活動が活発に行われたからであると考え。



(2) 課題

○ チームの技能の程度に応じて、得点方法を選択できるルールの工夫や自他の考えを可視化できる作戦ボードの活用を行ったことで、チームの課題を解決し、得点することを楽しむことができたが、個人の運動課題の解決が不十分な子供も見られた。そこで、集団競技においてチームの運動課題の解決だけでなく、個人の運動課題についても解決できるような単元構成を考える必要がある。また、教師が個別に支援を行ったり、ドリルゲーム等、解決方法を提示したりして、集団と個の運動課題をバランスよく解決できるようにしていく必要がある。